

## 多言語社会研究—社会言語学 (前期) でめざすこと

本講義では、ことばの社会性、政治性という観点から日本の言語社会を概観する。まず、言語について社会学的な視点からその性質をふりかえる。その知見を土台にして、ことばについての社会政策 (トップダウン) と個々人による言語運動 (ボトムアップ) をとりあげる。

言語は、個人個人が自分なりに使用しているものである。人は表現し、伝達する。それをうけとる人は、その人なりに理解する。人と人は、おなじではないから、ちがいがあがる。相手のことばを誤解することもある。逆に、相手と自分のちがいをなくそうとすることもある。相手に同化させようとするところもあるし、無意識のうちに自分から同化しようとしているところもある。使用している言語がちがう人とは、コミュニケーションをとることがむずかしい。できるだけ、ことばが通じる人とだけ交流しようとする。そのようにして、かべができる。

言語というものは、社会をうごかすインフラである。社会のなかでも重大なものである。だからこそ、言語について社会政策がとられる。また、個人が言語について社会運動を展開することもある。本講義では、言語政策と言語運動の諸相に注目する。

## 社会変動と言語

言語のありかたについて、議論したり、具体的に介入したりするきっかけには、さまざまな社会変動がある。世相が変化し、具体的な社会課題が発見され、言語のありかたを管理しようとする。いいかえれば、社会課題としての言語問題が発見され、解決にむけた政策や草の根運動が展開される。近現代の歴史をふりかえってみるなら、言語問題が議論される社会変動として、つぎのようなことがある。

- ・近代国家としての出発
- ・インフラ整備
- ・学校整備、カリキュラム、教科書
- ・徴兵、戦争
- ・植民地支配
- ・人の移動
- ・人口の増減
- ・戦後
- ・体制転換
- ・社会運動
- ・景気、災害、流行病
- ・技術革新

人の移動や技術革新などは時代に関係なく生じていることであり、うえに列挙したことの順番に意味はない。インフラ整備といっても、さまざまなことがらがある。鉄道や道路、地下鉄などの移動手段が整備されること、新聞、ラジオ、テレビなどのメディア、電話、電報、ファックス、インターネットなどの通信手段が整備されていくなかで、人と人の交流が促進され、言語接触がおきる。どのような言語をメディアにのせるのかという問いも生じる。話しことばをどうするか、文字表記をどうするかなどが議論され、言語規範を制定しようとするところもある。学校教育を整備するさいには、どのような言語でどのように教育を実施するのかという問いも生じる。植民地や占領地でどのような学校教育を実施するのかという問いも生じる。体制転換がおきれば、民主主義の体制下なりの言語政策がとられ、軍事独裁の体制下なりの言語政策がとられる。トップダウンとしての言語政策がとられるなかで、民衆なりの草の根運動を展開することもある。

つまり、言語をとりまく社会状況が変化し、そのなかで、言語のありようも変化し、変革されていく。だからこそ、「流行語から世相をよむ」こともできるし、そのときどきの世界の潮流に注目しながら言語のありようをよみとくこともできる。現在に注目することもできるし、わすれられた過去の状況に注目することもできる。未来への展望を議論することもできる。社会のなかの言語のありようについて研究するアプローチには、さまざまなトピックがある。そして、さまざまな研究方法がある。国会での議論、メディアの論調、本や雑誌記事、論文などの言論状況などを分析する方法もある。言語に関する社会調査に注目する方法もある。法律や条例などの制定運動や施行状況に注目することもできる。

## カテゴリー分類ということ

ここでは、多言語社会研究（社会言語学）の導入として、社会学的な「ものごとのとらえかた」について概観する。人は、社会を形成し、社会のなかで生活している。社会をつくる主体であると同時に、社会の産物である。その人の行動様式は、その社会のありかたに影響をうける。人の思想、行動様式が変化すれば、社会も変化する。その社会の動向をつかみとるための方法論や着眼点には、さまざまなものがある。社会調査を実施し、社会状況を把握しようとすることもある。統計にあらわれた数字から社会をよみとくということである。さまざまな着眼点から社会をとらえようとするため、ものごとを項目ごとに分類する。世界を項目ごとに分類することをカテゴリー化という。人間をたとえば年代によって分類し、その世代ごとの動態を把握しようとするわけである。そこで子どもであるとか、老人というカテゴリーが使用される。それぞれのカテゴリーは、現代社会においてすでに定着したものであり、あらためてその定義を問いかえすことはほとんどない。しかし、社会学では、自明とされる（あたりまえだとされている）ことについて、問いなおすことを大事にする。

そもそも、子どもとはだれのことなのか。老人とは、何才以上の人をさすのか。カテゴリー（分類）は、その社会をうつしだす鏡であるといえる。

たとえば、以前はゴミの処理方法として「もえる」ものは「もやす」ことが基本とされていたからこそ、「燃えるゴミ」と「燃えないゴミ」という分類だった。しかし、環境問題についての社会認識が変化し、その分類や呼称が変化している。環境問題に関心の高い熊本県水俣市では、ゴミの分類はかなり複雑である。水俣市では20種類の分別をしている。つまり、単にゴミといっても、その線引きや呼称は社会ごとにことなるということである。近年では、自治体がゴミ袋を指定し、有料にしている場合が多い。その指定ゴミ袋の名称を見れば、その自治体での「ゴミ」の線引きと呼称を確認することができる。

## カテゴリーとしての言語—線引き問題と呼称問題

社会言語学では、「ひとつの言語」とは自明なものではない。カテゴリーの問題、つまり線引き問題があるからである。おたがいに通じないことばをはなしていても、国家という装置とそれにもとづく国民という意識が「ひとつの言語」という観念をつくりだすことがある。そのとき、「ちがいはあっても、おなじことば」とされるのである。一方で、通じないわけではないにしても、国境の外で使用されている言語を異言語と見なすこともある。国家意識が言語への認識に影響をあたえるわけだ。人間が集団を形成すると、内部には同化力学がはたらく。同時に、外部を異化しようとする。そのような政治力学が作用する社会のなかで、言語は使用されている。言語こそが、そのような政治力学の装置であり、舞台であるともいえる。

ウチとソトを区別し、線引きするというカテゴリーの政治があり、そのなかのひとつに、言語の線引き問題と呼称問題がある。「同じである」と包括しようとする力もあれば、異化する力もある。

## 多様な呼称

言語の呼称は、政治的な問題をはらんでいる。その言語について論じる人ごとに、立場、問題意識がある。そのため、多様な呼称がうまれる。

たとえば、「沖縄のことば」について、沖縄方言、琉球方言、琉球諸方言という呼称（位置づけ）もあれば、沖縄語、琉球語という呼称もある。最近では、琉球諸語という呼称が多く研究者に採用されている。また、沖縄のことばによる呼称もある。たとえば、「うちなーぐち」「しまくとぅば」などという。

だれが、どのような視点で、その言語をとらえているのかによって、その呼称が左右される。

## 「おなじ言語」と「異言語」のあいだにある論点

その言語がひとつの独立した言語であるのか、それとも地域バリエーションのひとつ（方言）であるのか。それを明確に区別する基準はない。あくまで政治的な問題である。言語学的には、おさえるべき論点として、つぎのような点がある。

- ・ルーツ（祖語）がおなじであること（ルーツがことなるなら、異言語である）。
- ・どれだけ通じるか。相互理解度（mutual intelligibility）。
- ・話者のアイデンティティ。所属意識。

独自の文字表記があるかどうかは問わない。ただ、その言語の話者が、その言語が「独自の言語」であることを主張するために、表記法を制定し、辞書をつくり、聖書の翻訳を出版することがある。そこには、言語の威信を高めようとする目的もある。しかし、文字表記のない言語はたくさんあり、文字表記の有無は言語の優劣とむすびつけることはできない。言語学としては、言語に優劣はない。

そもそも、ひとつの言語とは、なんだろうか。日本語という概念について、糟谷啓介（かすや・けいすけ）はつぎのようにのべている。

なぜわたしたちはなんの疑いもなく「日本語」について語れるのだろうか。「日本語とはなにか」。この問いは、日本語の歴史や日本語の起源をさぐることによってこたえることはできない。なぜなら、すでにそこでは「日本語」という対象が自明化されているからだ。問題にしなければならないのは歴史や起源ではなく、わたしたちのもっている「日本語」というものの表象なのである。

いつのまにか、ここにある、あたりまえのものとして、「日本語」が意識されている。しかし、日本語とは、ひとつの、ゆるぎない、固定的なものなのだろうか。地域ごとに、はなしかたがあり、文法上の特徴もある。実態は多様である。それでも、共通している部分があり、「おなじ言語」とされている。しかし、観察をしたから同一視されているのではないだろう。同一視することが、さきにある。同一視する視線がすでにあるから、そのように見えるのだ。

そして、歴史をふりかえってみれば、近代には「おなじことばをはなす」ことが社会の要請として要求された。ことばを「矯正」しようとする教育があり、言論があった。現在の言語意識が形成されるまでの歴史的過程に注目することも重要な研究課題であるといえる。そして、「ひとつではない日本語」「複数の日本語」という、とらえなおしをしていくことも重要な研究課題であるといえる。

## 授業のながれ

第1回 カテゴリーとしての言語—線引き問題と呼称問題

第2回 インフラとしての言語

第3回 言語がつくるアイデンティティ

第4回 言語がつくる仲間意識と排除

第5回 言語政策と日本語の近現代

第6回 自治体政策と言語

第7回 条例と言語

第8回 観光政策と言語

第9回 台湾の多元文化／本土化政策と言語

第10回 韓国の法制度と言語

第11回 エスニックメディアの諸相

第12回 少数言語運動の諸相

第13回 表記改革運動の諸相

第14回 『言葉は社会を変えられる』（1997年）をよむ

第15回 まとめ

## 評価について

学生による関連情報の提示と小テスト：30%

期末レポート：70%

・授業の最後10分に、コメントを書いてもらいます。有意義な質問や関連情報を書いてください。ほかの学生が読んで参考になるようなことを書くようにしてください。「なるほどと思った」というような「ただの感想」はやめてください。

・小テストを2回くらい実施する予定です。

・レポートは、自分で明確にテーマを設定し、その主題・論点について適切な文献を参照・引用しながら状況と議論を整理したうえで、自分なりの考察をくわえるというスタイルとします。題・テーマが具体的であること、きちんと先行研究をおさえていること（文献を参照して要約あるいは直接引用すること）、自分なりの考察をくわえてあることを評価基準とします。なにかについて「まとめてみました」的な内容では不十分です。読者が読みたいと思える題・テーマであること、きちんと論点・先行文献をおさえたうえで、論理的に文章を構成していることが必要です。毎回の授業を、レポートを書くための参考、刺激としてとらえてください。

## 参考文献

あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院  
糟谷啓介（かすや・けいすけ）1994 「日本の「言語問題」」『現代思想』8月号、146-156  
かどや・ひでのり／あべ・やすし編 2010 『識字の社会言語学』生活書院  
かどや・ひでのり／ましこ・ひでのり編 2017 『行動する社会言語学』三元社  
佐野直子（さの・なおこ）2015 『社会言語学のまなざし』三元社  
砂野幸稔（すなの・ゆきとし）編 2012 『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』三元社  
多言語化現象研究会編 2013 『多言語社会日本』三元社  
中島武史（なかしま・たけし）2018 『ろう教育と「ことば」の社会言語学』生活書院  
安田敏朗（やすだ・としあき）2018 『近代日本言語史再考 V—ことばのとらえ方をめぐって』三元社

## 関連する雑誌

『社会言語学』（ウェブサイトで一部公開 <https://syakaigengo.wixsite.com/home>)  
『ことばと社会』  
『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』（[https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/cate\\_browse/?lang=0&codeno=journal&schemaid=3000&catecode=200250060](https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/cate_browse/?lang=0&codeno=journal&schemaid=3000&catecode=200250060) で全文公開）  
『社会言語科学』（刊行から2年すぎた号は全文公開 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jajls/-char/ja>)  
『言語政策』（2010年の10号からウェブサイトで全文公開 [http://jalp.jp/wp/?page\\_id=168](http://jalp.jp/wp/?page_id=168))  
『日本語とジェンダー』（2015年までの号はウェブサイトで全文公開 <https://gender.jp/journal/introduction/>)  
『日本語教育』（刊行から2年すぎた号は全文公開 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/nihongokyoiku/-char/ja>)  
『英語教育』  
『異文化間教育』  
『日本語学』  
『月刊言語』

## 連絡事項

・あべは金曜日しか大学にいません。3限と4限は「多文化社会とコミュニケーション」という授業、5限はこの「多言語社会研究」を担当しています。授業後はすぐに帰宅します。京都市在住です。ふだんは障害者の介助をしています。

・わたしの本『ことばのバリアフリー』を購入したい学生は、お知らせください。1800円です。